

一日一日の積み重ねが 歴史をつくっていく

語り手: **石丸耕一** (東京芸術劇場 舞台管理担当係長)

歌舞伎座、新橋演舞場などを経て、東京芸術劇場へ。
劇場全体の音響を統括している。



開館当初のコンサートホール

1990年8月、東京芸術劇場の建築工事が終わった。灼熱の太陽が照るなか、音響の石丸耕一は、コンクリートも乾いていない劇場に足を踏み入れた。舞台上にはまだ機材が山積みで、建物こそ完成したが、『劇場』はまだできあがっていないと感じていた。開館記念式典は10月30日に控えている。準備は間に合うだろうか。

池袋駅西口は、賑わう東口に比べ、地味な雰囲気だった。食事をするにも、休憩時にコーヒーを飲むにも、店が少なかった。しかし芸劇のオープンとともに、大きく西口が変わっていく予感と期待があった。実際、90年以降、駅前には新しい商業施設なども充実し、街は活気づいていく。

劇場スタッフたちはその夏、死に物狂いで準備をし、10月30日当日を迎えた。開館記念式典のコンサートでは、若杉弘氏の指揮のもと、東京都交響楽団が演奏。ワーグナーの「タンホイザー」で、芸劇は幕を開けた。当時、音響のオペレーターをしていた石丸は、その時の緊張感を思い出すと、今でも手に汗をかいてしまうそう。

開館から1年間は、記念公演が目白押しだった。コンサートホールでは、ジュゼッペ・シノーポリの指揮で「マーラー・チクルス」のプログラムが生まれ、大いに話題となった。コンサ-

ートホールの音響にはそれぞれ個性があるが、石丸によれば、芸劇の音は“華やかでリッチ”。その個性がマーラーの音楽によく合う。当時はまだ、マーラーが一部のマニアを除いて、一般には知られていないなかでのチャレンジだった。他の劇場でやっていない、新しいことに挑戦しようという気概に満ちていた。

その秋には第2回の東京国際演劇祭も開催され、たくさんの観客が集い、劇場は大いに盛り上がった。こけら落としからの一年を無事故で安全に乗り切る。石丸をはじめ、現場のスタッフは、お客様の笑顔と拍手を胸に、一日一日の役目を確実に務めた。

石丸が30年を振り返ってとりわけ印象深いのは、パイプオルガンの耐震工事を行ったことだという。90年代の終わり頃、震度4ほどの地震が起きた際、今後の地震によるパイプの落下の危険性が指摘された。そこで大地震に備え、対策を講じることに。この時の判断が功を奏して、2011年3月の東日本大震災では、飾りが落ちただけでパイプは1本も落ちなかった。

いつだって災害は避けられない。何かあるたびに学んで、改善していく。コロナ禍においても、どうすれば安全に劇場を開けることができるのか、劇場人たちは常に考えている。

100年続く劇場を目指して、今日一日を丁寧に積み重ねていく。



開館記念
オープニング公演
東京都交響楽団の
ポスター



開館特別記念公演
マーラー・
チクルスの
ポスター



開館特別記念公演
マーラー・
チクルスの
プログラム表紙

INFORMATION

東京芸術劇場では、劇場をご利用になるすべての方の安全と安心のため、新型コロナウイルス感染拡大防止に関する取り組みをおこなっています。ご来館される皆さまは、当劇場ウェブサイトの【東京芸術劇場における新型コロナウイルス感染症対策とご来館される皆さまへのお願い】や館内掲示されている注意事項などを、ご確認ください。



本号の発行が当初予定より遅れましたことをお詫び申し上げます。次号の発行は2021年1月5日を予定しています。



東京芸術劇場は、1990年に開館し、今年、30周年を迎えます。周年を記念し、ロゴ展開や記念事業の開催などを行っていきます。

新型コロナウイルス感染症にかかわる諸般の事情により、掲載情報に変更がでる場合がございます。
最新情報は、東京芸術劇場や各主催者のHP等でご確認ください。